

番組

連吟

笹之段

山下あさの  
今村 宮子  
前田 和子

独吟

融

波多野 晋

仕舞

采女

松浦信一郎

龍虎

今村 一夫  
森本 哲郎

武富 康之  
上野 雄三  
赤松 禎友  
生一 知哉

山本 麗晃

能

鉢木

山本 章弘

喜多 雅人

福王茂十郎

広谷 和夫

中村 宜成

守家 由訓  
古田 知英

赤井 啓三

早打 高野 和憲  
間 野村 太郎

松浦信一郎  
梅若 猶義  
生一 知哉

山田 薫  
河村浩太郎  
今村 一夫  
森本 哲郎

波多野 晋  
上野 雄三  
上野 朝義  
大西 礼久

休憩二十分

魚説経

狂言

善竹 隆司

善竹 隆平

小西 玲央

仕舞

実盛

上野 朝義

隅田川

大槻 文藏

今村 一夫  
松浦信一郎  
波多野 晋  
森本 哲郎

連吟

江口

梅若長左衛門

梅若 桜雪

梅若 紀彰

独吟

玉取

山本 順之

休憩十分

井上 華菜

山本 博通

中村 宜成

福王 知登

喜多 雅人

山本 哲也  
大倉源次郎

中田 弘美  
竹市 学

船弁慶

早装束

間 野村 裕基

武富 康之  
大槻 文藏  
赤松 禎友

山崎 友正  
山田 薫  
大槻 裕一  
川口 晃平

山崎 正道  
梅若長左衛門  
梅若 桜雪  
梅若 紀彰

十七時頃終了予定

鉢木 あらすじ

旅の僧(ワキ)は信濃国から鎌倉に向かう途中、上野国・佐野で雪に見舞われ一夜の宿を借りようと通りがかりの家を訪ねます。その家の主人・佐野源左衛門常世(シテ)と妻(ツレ)は一度断りますが、妻が来世のために功德を積むべく、僧に宿を貸すよう助言すると、常世は僧を呼び戻し、貧しいながらも粟の飯を炊き、大切にしている梅、桜、松の鉢木(盆栽)を薪として火にくべてもてなします。僧が名を尋ねると常世は名乗り、今は落ちぶれているが「いざ鎌倉」という時には、たとえ古びた鎧や武器を持ち、瘦せ馬に乗ってでも一番に駆けつける覚悟であると語ります。僧が常世の家を去った後、早打ち(アイ)によって、関東八州の武士達に鎌倉へ参集するように触れが出されたこと伝えられます。常世は僧に語ったとおり、瘦せ馬に乗って鎌倉へと駆け付けました。執権・北条時頼は続々と集まる武士たちの中から、みすばらしい姿で瘦せ馬に乗った常世を御前へ連れてくるよう家臣(ワキツレ)に命じます。時頼は、御前に進み出た常世に、雪の日の僧こそ自分であると明し、その忠誠心を褒めます。常世は、褒美として以前の領地を返してもらい、鉢木にちなんだ梅田、桜井、松井田の三か所の領地を与えられると喜び勇んで、佐野へと帰っていくのでした。

魚説経 あらすじ

摂津国兵庫の浦の漁師が、殺生を繰り返す生活を嫌い、にわかに出家して、旅に出ます。その途中、持仏堂を建立して、その住職を探している男に出会います。住職に迎えてもらう話になりさっそく説経を頼まれますが、経を知らぬ出家は漁師上がりなので、ろくにお経も読めず、苦し紛れにそれらしく、魚の名を連ねてごまかそうと説法を始めます。「いいでいサワラ説法を述べんと、いかにもススキにすすけたるクロダイの衣を着し」云々と魚介類の名前尽くしの説経が見どころの狂言です。

船弁慶 あらすじ

平家討伐後、兄・源頼朝と不仲になった源義経(子方)は、武蔵坊弁慶(ワキ)と従者(ワキツレ)、愛妾の静御前(前シテ)とともに、都から西国へと落ち延びる途中、摂津国・大物浦に着き、宿をとります。ここで、弁慶は、静御前をこれ以上同行することは難しいので、都へと帰すように進言し、静御前に都へ帰るようにとの義経の言葉を伝えます。静御前は別れの酒宴で、白拍子姿で舞を舞い、勾踐と陶朱公の故事を引いて旅の前途を祈念すると、義経たちを乗せた船が旅立っていくのを見送りながら、涙を流して離別を悲しむのでした。義経の一行は、船頭(アイ)の用意した船で、西国に向けて海へと漕ぎ出します。するとにわかにな風が変わり、海が荒れてきたかと思うと、壇ノ浦で滅亡した平家の一門が亡霊となって現れます。総大将であった平知盛の亡霊(後シテ)は名乗りを上げると、義経を海に沈めようと、執念深く薙刀を振りかざして襲い掛かってくるが、弁慶が数珠を揉んで五大尊明王に祈祷すると、亡霊調伏されて沖の彼方へと消えていくのでした。